



この計画は、手紙を書くための建物「手紙処」と、そこへ導くサイン「手紙標」とでできています。霊園内の参道沿いに建っています。ここで書く手紙とは、生前から家族や親族、友人 などに宛てて残しておく手紙のことで、本人の亡きあとに、お寺を通して残された方々の元に届けられます。ゆっくりと手紙をしたためられるようにと「手紙処」が設けられたのです。 「手紙処」は、校倉造りでつくりました。校倉で作られた奈良の正倉院が古の記憶の収蔵庫であるように、様々な人たちの思いが手紙のかたちで長く留めおかれるには適していると考えた からです。手紙処は、周りに立つ沢山の墓石から浮き上がらせようと考えました。動かない墓石の記憶の中で眠る人と、ここを訪れる現在の人たちの間をつなぐためには、土地に束縛さ れない手紙のような軽やかさが必要だと考えたのです。そのため、地盤の傾斜に関係なく建物を細い鉄骨で地面から切り離し、さらに建物周囲に回廊状の空間をとり、その中を校倉の壁 で囲いました。地盤から浮かぶ床と天井。2枚の薄い紙のような水平面に挿まれた人の思いを、木の校倉が大切に堰きとめる構成としました。

「手紙標」は、古の作家や科学者、芸術家などの著名人が、実際に家族や知人に宛てた手紙を刻印した道標です。校倉造りの「手紙処」に向かう道すがら立っています。手紙を書くための 心の準備を与えてくれる木質のやさしいサインです。





















